



大森梨紗子は1980年生まれ、2002年に武蔵野美術大学を卒業後、兵庫に移り廃材で家を手作りした「あさって農園工房」で夫と共に自給自足生活を始め、現在に至る。

詳細はWEB「絵描き百姓*大森梨紗子*」をアクセス願いたい。国内外のグループ展に積極的に参加する大森だが、2008年以来5年ぶりの東京での個展である。

大森は今回、綿布若しくはキャンバスに油彩の作品を15点、展示した。それぞれのタイトルには、モチーフである植物の名前が刻まれている。

植物を描く、ということになれば、客体的なオブジェとして、主体的に擬人化して、暗喩としての象徴として描く場面を思い起こすが、大森の場合、何れにも当てはまらない。

大森はまず、植物を正確に描いている。形と色といった外見だけではなく、自らが育てていることを立証するが如く、花が咲くまでに至る「時間」が込められている。

次に大森は、自らの視線を素直に表している。対象の花に焦点を当て、背後に見える葉や茎を量している。これは写真の技法ではなく、見えるが俤に描いている証拠だ。

ここで留意したいのは、大森はインスタレーションを行おうとしてはいないことだ。画廊を自らの庭に見立てない。飽くまで一つの対象に対して一つの作品を仕上げる。

また、大森は所謂リアリズムに準じない。大森は自らが見えるように正確に描くとしても、絵が絵であるために描こうとしない。ここは重要な観点である。

そして大森の絵画の最大の特徴は、描かれている花が地中深く張る根を描いていることにある。根の先端から花卉まで、末端から末端を描ききっているのだ。

大森は植物を育ててきた。育てた植物を食物としているのだろう。自らの栄養分になるための植物の総てを知ることとは、自らを知ろうとする態度であると解釈できる。

自らと子供と植物を育てながらも、絵画を育む。その努力は並大抵なことではないだろうが、大森としては当たり前の日常に過ぎないのかも知れない。

日常を育てること、それこそ権威的な絵画を培養するのではなく、現代美術の任務である「いま、ここ」の形成である。大森はそれを続けることが人生=芸術となるのである。

